

「日本と日本人」
ブルース・L・バートン
1995.2.8 放送

今回は、「日本」と「日本人」ということをテーマにして話したいと思います。

三カ月ほど前にもこの番組で在日外国人について話しました。主旨は、日本人は、外国人に対して、その実態に合わない先入観やステレオタイプをたくさん持っていて、それが改善されない限り、日本の国際交流はうまくいかない、ということでした。

実は、日本人は外国人に対してだけではなく自分の国や社会に対しても、色々なステレオタイプやコンプレックスをもっているように思います。これもやはり外国人との交流を妨げ、日本や日本人を孤立させる原因になっています。

まず言葉の定義から始めましょう。私は念のために国語辞典を取り出して「日本人」という言葉を引いてみましたが、そこには二つの意味が載っていました。一つ目は、法律用語としての「日本人」で、これは単に、日本の国籍をもつ人を指します。二つ目は、一般用語としての「日本人」で、これは、「日本列島に居住し、文化・言語・風俗を共有する民族」という意味です。

要するに、「日本人」とは、国籍を指す場合と民族を指す場合とがありますが、皆さんが普段この言葉を使う時は、後者、つまり民族としての「日本人」を想像していると思います。

一つの例を挙げましょう。もし、外国人が日本に来て、長期滞在をした後、永住権なり日本国籍なりを取ったとしましょう。問題は、周りの日本人がその人、あるいはその人の子孫を「日本人」として認めるかどうかです。答は恐らく「ノー」でしょう。何代経ってもあくまでも「アメリカ人」なり、「中国人」なり、「外国人」です。なぜかと言うと、「日本人」という概念が、一般的に国籍ではなく民族的アイデンティティを指すからです。外国人は日本の国籍をとることができますが、日本民族の一員にはなかなか入れません。

言い換えれば、日本人の民族意識が非常に強い、ということになります。このことは、他の国の場合と比べたら一層明確になります。

私はアメリカの事情が一番よく分かりますからアメリカの例を挙げますが、もし外国人がアメリカに定住して国籍を取得した場合、その人、またはその人の子孫が一般的にどう認識されるでしょうか。結論から言えば、移住してきた本人は、一生外国人扱いされるかも知れません。しかし、子供や孫となると、事情が違ってきます。彼らはアメリカ人であって、たとえジャパニーズ・アメリカン、チャイニーズ・アメリカンなどと呼ばれることがあっても、アメリカ人に変わりはありません。これは、「アメリカ人」という概念が、日常的にも民族より国籍を指すからです。

しかしアメリカに住み着いた日本人は「日系アメリカ人」と呼ばれることがあっても、日本に住み着いたアメリカ人が「アメリカ系日本人」と呼ばれることはありません。こう

言う概念があり得ないほど、日本人の民族意識や国民的アイデンティティーは強く、排他的です。

この点を裏付けるもう一つの例として、いわゆる「日本人論」を取り上げたいと思います。日本の大きな書店に行くと、必ず、『日本人とは何か』『日本とは何か』『日本人の精神構造』と言うような本がたくさんおいてあります。いずれも、日本人の特徴や本質を説明しようとしているものです。これは、西洋人の目から見れば、非常に奇妙な現象です。アメリカの本屋で、こうした類の『アメリカ人とは何か』という本を見たことがありませんし、仮にそういう本があっても、買う人はだれもいないでしょう。

こう言った「日本人論」の内容は、著者によって多少違いますが、大まかに言えば、次のようになるでしょう。つまり、日本人とは、主体性や自律性に欠け、他人や組織に依存する傾向が強い。個人より集団を重んじる場合が多く、上下関係にも非常にうるさい。また、理性的というよりは感情的な性格を持ち、ものの原理にこだわるよりはその時その時の状況に合わせて行動する。これが、「日本人論」のなかで描かれている日本人の一般的な特徴です。いうまでもなく、専門家だけではなく、一般的にもこのような考え方をする人が多いようです。日本人共通の自画像とでも言えましょう。

しかし、この「日本人論」には、大きな問題点が二つあると思います。

第一の問題点は、日本人は皆同じだという前提です。確かに、日本社会はアメリカ社会に比べて、個人差の比較的に少ない、均質なものだと思います。だからこそ、日本人の民族意識はアメリカ人のそれより強いのでしょう。しかし、「日本人論」のイメージに合わない日本人が大勢いることも確かです。主体性をしっかり持っている人、他人や組織にあまり依存しない人、集団より自分を大切に人、上下関係をあまり意識しない人、こう言った日本人も少なからずいます。彼らは「それでも日本人なのか」あるいは「同じ日本人とは思えない」と批判されることが多いのですが、こうした言葉自体が、日本人の実態が、イメージより多様だと言うことを端的に示しています。実際、同じ日本人でも、その人の年齢、地位、人生経験その他の状況によってずいぶん考え方や行動傾向が違います。日本人は皆同じ型にはまった民族ではなく、かなり多様性のある民族だと思います。

「日本人論」のもう一つの問題点は、日本人は、他のどの民族とも違う、特殊なものだと言う考え方です。これは、客観的に見てあまり根拠がないだけではなく、日本の国際交流・対外関係を妨げると言う意味では非常に危険な考え方だと思います。

日本人の特徴と言われるものは、実は他の民族にも多く見られます。平均的に日本社会と多くの共通点を持つのは、言うまでもなく韓国、台湾、その他のアジアの諸国です。これらの国々は、日本に地理的に近いし、歴史的にも多くの経験を共有していますから、社会的な類似点があってもおかしくありません。これに比べると、欧米やアフリカなどの社会は、日本とかなり違うと言われますが、しかしこれは全般的な話であって、なかには日本によく似ている部分、あるいはかなり日本的な性格を持っている人もいます。例えば日本とよく対照されるアメリカでも、企業活動や政治の場で個人より集団が優先される場合

が多く、様々な社会集団の内部でも上下関係も非常にはっきりしています。個人レベルでもものの原理によるのではなく、その時の状況に合わせて行動する人も大勢います。もちろん、アメリカの社会が日本のそれとまったく同じだと言うつもりは毛頭ありません。それぞれの特徴や国民性があるに違いありませんが、同時に両国の社会がオーバーラップするところ、共通するところも多くあると言うことを忘れてはならないと思います。

民族的アイデンティティーを持つこと自体が、悪いとは思いませんが、民族意識が強ければ強いほど、他民族との壁も高くなると思います。改めて言うまでもなく、経済大国の日本が、これから色々な形で、世界の各国との関係・絆を深め、国際協力を増やす必要があります。具体的な対策はそれぞれの専門家にお任せしなければならないかも知れませんが、こうした国際化の時代だからこそ、一般国民も、今までの民族意識を変えるという大きな課題に取り組む必要があると思います。日本は他の国とは違う、日本人は特別だ、と言う考え方は結果として日本を孤独な存在にさせ、日本人や日本社会のためにはなりません。日本が世界のあらゆる舞台に立とうとしている今こそ、こんな時代遅れの自画像を描き直す時ではないでしょうか。

では、また。